「平和運動・戦責告白・沖縄」

井上良雄

このセミナーの主旨は，この25年間本土の教会が何をしてきたか，また何をしているか，また沖縄の教会が，この25年間何をしてきたか，何をしているか，ということをひざをつき合せて話し合いたいということです。発題を命ぜられて，私は戦責告白ということに焦点を合わせまして，この25年間本土の教会が何をしてきたか，何をしているかということをお話したいと思います。

話をいたします前に，きょう初めてお会いするかたも多いのですから，自己紹介的なことを少し申し上げますと，私はもう齢をとりましたけど終戦の年に洗礼を受けた人間です。それまで3年ほど東京の教会で求道生活をしておりましたけれど，したがって，戦争中の教会につきましては，求道者としては知っていますけれども，教会員としては経験していないのです。そういうことで敗戦を迎えまして，1951年ごろから同じキリスト教団のかたがたその他の教団のかたがたといっしょになりまして，「キリスト者平和の会」という会を作りました。そこで十数年働いておりましたけれども，1964年ごろに，その会を脱退いたしまして現在に至っているわけです。現在は教団の社会委員会に属しております。本務は，東京神学大の教師ということになっておりますけれども，ご存知のような紛争で，現在は名目的な教師です。

そういう人間ですので，そういう人間の目をとおして見ました戦争責任の問題ということになるわけです。戦争責任のことについて，お話申し上げますためには，やはり日本の教会あるいは教団が，戦争中何をしてきたか，ということをまず，申し上げなければならないと思いますが，先ほど申し上げましたように，私はまだ教会員ではございませんでしたので，自分自身体験として申し上げることはできないわけです。戦後書かれた記録や報告によって申し上げるよりほかないわけです。戦争中の日本の教会のことについて，おそらく一番よく調べているのではないかと思いますが，森岡巌さんという新教出版社のかたが「福音と世界」に，「大平洋戦争下のキリスト教」という文章を連載されました。その中の一節を読んでみますと，

「後で明らかにされるように，日本のキリスト者のすべてが初めから戦争に肯定的かつ協力的であったのではない。キリスト者は，明治以来内村鑑三の非戦平和主義，トルストイ流の絶対平和主義，あるいは大正年間以来の社会的福音流の社会倫理の影響を受けて，戦争をなによりもまず「罪悪」として批判的に受けとる感覚を持っていた。また昭和初頭以降ではいわゆるSCM運動にその典型がみられるように，マルクス主義的社会科学の問題意識と，現実認識も，教会の中に問題を投じていたはずである。しかしそのような戦争批判の原理と立場は彼ら少数者の前に，巨人のように立ちふさがった戦争という既成事実に